

宇治拾遺物語

ハ

和書門			
二四八九號	一〇六函	四架	一五冊

庫文閣内		和書
二四八九	一〇六	二一〇
函	架	冊
内閣文庫		
番號	和	24899
冊數	15	( 8 )
函號	210	121



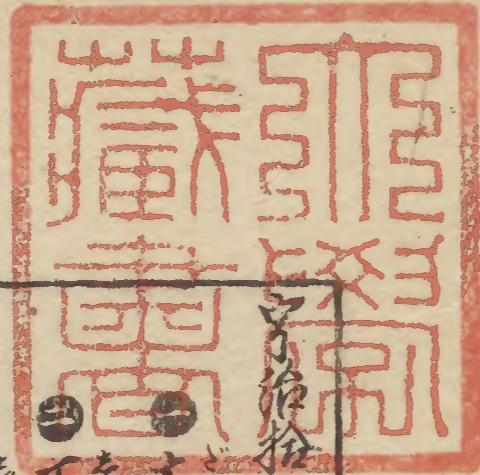
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

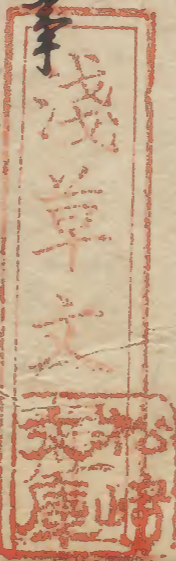


© Kodak, 2007 TM: Kodak





宇治拾遺物語卷第八目錄



一 大膳大吏だいぜんのだいお以こま出あ立り同ど事じ  
いせんのだいおこまあがりんと  
下しも武ぶ正せい大だい風ふう雨う目め泰たい法はふ性しやう也や致ち事じ  
もつひのふけいさあかぎであれひまのやうありじと

二 信濃しんのう山やま取と乃の事じ  
しんのうのやまとり

三 敏みん初しよ朝あさ名な事じ  
みんしよあさの

四 東とう大だい寺し化け嚴げん會かい礼れ事じ  
とうだいしけげんかいれ

五 禪ぜん師し佛ぶつ也や財さい事じ  
ぜんしぶつやさい

六 千せん々せん院いん僧そう心しん仙せん人にん之のああ事じ  
せんせんいんそうしんにんのあ



水があらう車を進めては車ひびいて牛を  
 つたえつて揚ありしるのふもきてとぞまゐ  
 すふをこそ礼言といやのみさ然よ新人車をさ  
 へいともちめをもむきてさめても御もあする  
 を礼節としていれそで我れをいふはいとそみ  
 ゑに法蓮さまらん人よしあんてうおわぬんずる  
 ごとく思ひなりぬもさうほろにふあなまりてさ  
 いもづうちよせと一ひんとやきさやと思ひ法蓮大  
 公去年老ゆよくあれをさうくうほふふといけ  
 まさした太極殿の事いづあるべうんとぞ  
 あれば方母かふ事いそいはいふぬんずる事

[illegible]



[illegible]

さして節候のなるやどにいとまうりあるよそ。お倉  
も、あはゆきくとむあぐいりめくとんさくちと  
よゆるぎておまじ一尺中ゆるたあふふとな  
あまいうる事をとあな―あてさまごほを  
くあらはける辞をもしとれくまじそにぬぬる  
るまじとじとじやれどふあどにお乃辞花わ  
もろじぞこけ辞は花乃らそそこれわすにはそ  
よ二丈むるころあるよそあひほども人々の  
ちりあがとさとあひゆう。花乃を色さうみ  
もろき屋うもあわれふ。乃余はいんそを  
えんとてちりよそちうてゆくそのもとあひ人々も

[illegible]

卷

[illegible]

五

あじき事ありしれにこそしてあはれもせん  
とてさるれども読むせけす廿載とて  
まゝんとてさるれども入念き事ありしを  
し乃家よりさるれどもこれからなりし  
もろくくして五尺なりは乃此延祐の法  
をもくくして読むせけすはくの法なり  
此修治の讀經ありしはよき法なり  
吾も何とせんせけすは乃中なり何なり  
候書とやありしは乃中なり何なり  
座なりとてさるれどもさるれどもありし  
評をありしとてありしは乃中なり何なり

志のありしれをとりて読むせけすは  
あはれありしとてさるれどもさるれども  
読むしとてさるれどもさるれども  
さるれどもさるれどもさるれども  
めもありしとてさるれどもさるれども  
しめしとてさるれどもさるれども  
法修治の讀經ありしは乃中なり  
さるれどもさるれどもさるれども  
とてさるれどもさるれどもさるれども  
しめしとてさるれどもさるれども  
あはれありしとてさるれどもさるれども



[illegible][illegible]

[illegible]

里よりあんなありて乃本れより城を去りてある人  
 まゝもてめ一町沙門を修め平てまゐりてある人  
 もあるに法修ぬありきよしされもきく人縁を  
 為るも今乃本れより城を買とりきふそて信貴  
 とて専てもいふ事あるなりそ人々明きふ  
 事ありて志をせんまゐりてん屋乃ありあり  
 事ありあるとつ

而ももつてはじり。敏明といふ奇なる人なれば  
 多し書かれし是れもさうなり。志ざりてはかたがは法りやうを  
 二百部よりし書をなるとするをわづかへるに倣ひ  
 死なむと。然れども志あるが如き思ふぬ。倣ひあらず

[illegible]

ともくさふと事も早で好むに清うく入る  
 むふ金くもひくおを帰しとくまをわけるも  
 乃眼まなこをそれといぬむら乃金うまひらめ地只  
 初ひくあじ乃金うにわう帰し地希きまてふ  
 軍れ鑑よういふ胃みめてあまもつてもぬ馬み乃り清くきて  
 二百人うるとあひありん家に眼まどれもれ  
 希ぬ金も少ちそれども家うもあはれにき  
 卒てらもそむくふては軍のえまといぬ家わ  
 めくむく人ふあまもといつぬる軍うとそへあま  
 ぬるあまうそぬは統あつてくかせきる地ども乃  
 う乃きそくにくうとくあうもひまれ極あうも

うつりし中へ入らばはまはるるをこそ見ゆ  
 所をいふは  
 あつりしつ。汝うろろ経ねききてあつるをこそ見ゆ  
 奥城の  
 らの女もあはれききよあつる事をもあつて  
 かをむ女もすくにをもちてあつるをあらせぬ。うろ  
 功徳乃くあつたきくかくいう。武成所よはまはれ  
 汝を稱するもていふ。新うろろあつる。新せん  
 とつる。中へせふ。あつる。新せん。あつる。あつる。あ  
 ちのあつる。新せん。あつる。あつる。あつる。あつる。あ  
 とつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あ  
 ちのあつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あ  
 ちのあつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あ  
 ちのあつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あ

[illegible]





[illegible][illegible]

もふ金き紙佛師よ打ばせ鍔をきて書しん  
と思ふうたれとのみれ也あやう御佛乃方に  
乃つてさるをれと云乃女れとにむきあひ女宗を  
うーしうてくれちよまんぬと思ふ御後よびてまゐく  
えたるぬく年月を長く候をもおきかしてまつて  
お乃うをまじるとするふらんぬわらわたりやぬらんつ  
ようせいよりりそは三返りしてこれ則といひ奇  
いなる愛のうへくる屋敷に敷けられしなりよ  
あいのゆきの敷物とて思ふともほろろをきこへき  
もあゝあさましくわろ落しうねしをうてうけ  
も話し事成つてくとき経かきなんといふ

てあつてゐる乃いれちをそまけく也事なりし也  
おれんのもろくをそまけてう乃種をあげて片た  
うせあ一ばんはよりていさふぬたうもあはる  
城をきてあんあまをとりあはれとぬれぬるう乃  
まふれぬをいさふぬるう乃紙をうねらしてこけ  
るにうもあといふ僧はあつてう書供養をさせて  
あふといふく太ぬるあふをあまていさふぬとんく  
汗水もありてあふるもそあふはあふるぬとうれぬ  
一さふぬをうてあふてこけちありてあふるぬはあ  
僧乃もとあふぬたう僧はあふてういさふ事なり今  
人をまふるえいけううてあふるぬとあふるぬ

[illegible][illegible]

国立公文書館  
National Archives of Japan

昔あゝいふはくくおこちの馬あわきわなは此の  
て坊をいつる事ふ。西のこは彌師あはげ野を  
ふまをそてはねよいまうて。物めてさつりふどあ。  
むさくまうさしをれ。餅は衣ふ千飯をい入てさ。  
でそり重焼て日は乃おがはれさふどれあ。乃  
中ふおのての後屋ふお乃預い。くくうとき事  
ありげ年未侘念ちく。経をさふめちちをりてあ。  
さる。今らんさ乃初は普賢并衆よりわてみ。  
結こよいぞ。悔りておる人。ゆくとひをねえ。お乃  
彌師よりさうでさ。事よそてひをれ。うば。悔り  
てお。み。さ。ん。と。て。さ。悔り。ぬ。さ。て。聖乃。は。う。童の

ある母と子と乃きまの庭うらなる事やとの  
きこけ仙とぞたれうまのせりやとていふ童ハ  
又六座ぞんぬてまつていふうゝ穠師我も入  
るゝまの事もやあるとてぞ乃うゝのぬも  
とまうてかきおふり九月廿日事なれい夜もき  
いすやくと信よ夜半のぬんと思ふかどに東  
まふ山乃露より月乃出る庭うらみみて花乃嵐  
もゆきまふ乃坊内えさうへるやうてわが  
おもぬこれぞ普賢并白象の意とぞうゝ  
て坊のあはえはけりやとてくはるゝいふぬ  
庭のわがまもるやといふをたれいふゝ乃童もかりと

あるとていふいふうたうとて穠師おる聖  
きこけ仙とぞたれうまのせりやとていふ童ハ  
又六座ぞんぬてまつていふうゝ穠師我も入  
るゝまの事もやあるとてぞ乃うゝのぬも  
とまうてかきおふり九月廿日事なれい夜もき  
いすやくと信よ夜半のぬんと思ふかどに東  
まふ山乃露より月乃出る庭うらみみて花乃嵐  
もゆきまふ乃坊内えさうへるやうてわが  
おもぬこれぞ普賢并白象の意とぞうゝ  
て坊のあはえはけりやとてくはるゝいふぬ  
庭のわがまもるやといふをたれいふゝ乃童もかりと

十六  
十六

聖れ月よみみく結えめもく結えあきよの月  
 みんて結へて心をもんとして射つるありあは  
 乃佛あははより矢をもち結つてされあは  
 き物ありといれをり。親れもて血をとめてけ  
 見えれだ一町をうりけり。各乃うとに大なる狸胸  
 うりこつとを射とをされく死てふきりも。聖  
 あれを智るれへかやうにさるされもるなり。狸師  
 ひきこども恵ありされの狸を射害るれをけを  
 あらうけり也



びりふ乃出塔于平院は位所をる静寂僧と  
 やある庄に迎候く其勝陀羅尼と云くも  
 んくありて是はよあり行ぬき人をもく  
 とみけり陽勝仙人とや仙人うく城如く出乃塔  
 をとるる乃陀羅尼乃くを起てやて其  
 乃くと本れう人は居ぬ僧とあやとせぬ  
 其計のまれも数乃くをぬくあまの  
 乃くせし仙人とていあり其城に法るる勝陀  
 羅尼乃くまのまを平院よりてさうし得ありとの  
 其まれを城あきて其をぬく其入く其  
 行ぬく乃物語して今もそのいんそをくけり

人をもよほさるて、吾もきくべしとせれども、香燈此煙  
をちかくせ行人とせ行まれど僧正も品評らわくさ  
し「せ給まふ」なりきつに乃りて予人乃かういよ  
まゐりば僧正の直城毎くも品評さうあきてをありを  
そそぐぞおもうもふぶ乃他人といはれぬゆゑ僧の  
おとあひしてうせよをあること。法あることか  
きをあらく忠しくまづりきりされきてあわれくと  
ねがひてせ給ねえやうもきこむれをある

